

日本看護歴史学会 會報

日本看護歴史学会
第37号
2001年10月15日

看護史を旅する

小玉 香津子

名古屋市立大学看護学部で開かれたこの夏の大会に際し、「看護史の旅」の写真展を開かせていただいた。一九八九年からの十年間に六回、西洋看護史をたずねて十九世紀までのヨーロッパとその周辺を旅した記録を、厚かましくもご覧に入れた。写真はすべて、リーダーの高田みつ子氏はじめ旅の仲間らの作。私は、一度たりとも写真を撮らない、結果的にずうずうしい旅人であった。ふざけて「印象主義」などと云い、実際、その時

その場に五感を集中させて得たイメージは、写真よりも鮮明に残ると思っているが、旅のあとに誰彼のお恵みくださる写真を手に、はっと新たな気づきをするのもしばしばであることは告白しなければならぬ。もちろん、写真が旅の全

容を反すうするための有用な手立てであることは間違いない。それで「厚かましくも」の写真展と相成った。

最初の二回を「ナイチンゲールゆかりの地を訪ねる」と題したように、我々は単純に、自分の目で現物を見る、その地に立つことを目的に旅を始めた。事前の資料調査により、見どころ立ちどころ（？）は細部にわたって確かめておいたから、旅ごとに、我々の知識としての看護史は広がっていった。しかし、「キリスト教と看護のつながりをたずねる」「中世の巡礼路を行く」あたりから、何かを見たより、どこかに立ったりするということ、我々が自らを看護史に投げ込むのだと実感するようになってきたと思う。そう、「看護史の旅」

は「看護史を旅する」に変わったのである。しよってるにも程があるとお互いに笑いつつ、我々はヒストリアンとなり、気分はヘロドトスであった。いつの間にか自在に看護史を旅していた。

「看護史の旅」から「看護史を旅する」への脱皮は、我々の見たり立ったり、ましてや写真に撮ったりが、「我々が発見する」というニュアンスをもつ、さまざまな出会いに変わったことを意味する。イタリアはアッシジの町はずれで、地元の人々が聞いたこともないと云っていた十二、三世紀の古い病院跡を、文字通り発見した我々は、聖フランシスコが己れに打ち克つてらいた者に手をさしのべた日へと、時を駆けた。スペインのパンブローナでは、中世の看護を探していた我々は二十世紀生まれのオプス・デイ（神の仕事）活動に出会った。普通の社会生活をしながら信仰の実践として、病院等で患者や老人の世話に打ち込むカトリックの人々である。我々の思いは、人間の精神と行動の二千年にわたる軌跡をめぐる。そして、サレルノで見つけた「養生訓」、クリミアの歴史家の手になる「バラクラヴァ」といった書物との出会いは、旅のあとにまなび、我々に看護史を旅させてやまない。

第一六回大会予告

◆開催期日
平成一四年八月三十一日（土）
～九月一日（日）

◆テーマ
「日本と世界の看護史を探求する」

◆会場
山形県立保健医療大学保健医療学部看護学科

◆内容

第一日目

講演一 高田みつ子「ナイチンゲールの看護を訪ねて」

講演二 未定

研究発表（口演とポスター）

総会・懇親会

第二日目

看護史研究放談会

分科会

パネル展一 ナイチンゲールの旅

パネル展二 日本の看護史

パネル展三 日本の助産婦史

◆研究発表の申し込み
演題締切日・平成一四年四月一日

○日（当日消印有効）

演題申し込み方法・演題名と氏名、所属、会員番号、連絡先を記入した官製はがきにて申し込んでください。

抄録提出・六月末日

◆大会事務局

〒九九〇―九五八五

山形市飯田西二―二―二

山形大学医学部看護学科

高橋みや子宛

